

養護教諭の摂食障害に関する認知度の研究

——養護教諭と当事者への調査と聞き取りから——

田 中 友 理

【問題と目的】 高宮ら（2007）の小児摂食障害予防における養護教諭による学校内での啓発活動の研究や、三井（2011）の養護教諭による摂食障害の早期発見・早期支援の研究など、摂食障害の教育現場での発見、相談、予防活動における養護教諭の存在が重要であることは先行研究でも知られている。一方、野村（2003）の摂食障害における自助グループの有効性の研究や、村田ら（2012）の当事者による摂食障害者回復支援活動の研究など、摂食障害当事者による自助グループの活動が注目されているが、摂食障害当事者の養護教諭との関わりや養護教諭と自助グループの連携に関する研究は見当たらない。そこで、本研究において、養護教諭の摂食障害児童・生徒との関わり、自助グループ認識や当事者の養護教諭との関わりを調査し、将来の摂食障害児童・生徒との関わり方や予防教育の基礎的資料にすることを目的とする。

【方法】 関西圏の小・中・高等学校に勤務する養護教諭、摂食障害自助グループに参加する摂食障害当事者に研究協力を求め、自記式アンケート調査票の配布、回収を行った。教育委員会、養護教諭教員会、グループのまとめ役にあらかじめ調査趣旨の説明を行い、許可を得た。養護教諭への調査内容は、摂食障害児童・生徒との関わり、摂食障害予防教育の取り組みや自助グループの認知度についてなどである。摂食障害当事者への調査内容は、養護教諭と摂食障害における関わりの経験や要望についてである。また、同意を得られた養護教諭と摂食障害当事者を対象に、質問紙調査内容のより詳細な研究を行うためのインタビュー調査を実施し、養護教諭の摂食障害児童・生徒との関わりや、将来的な摂食障害予防活動での自助グループ活用の可能性を検討することにした。

【結果と考察】 多くの養護教諭が摂食障害について知っており、半数以上が摂食障害児童・生徒との関わりと困った経験があった。しかしながら、摂食障害当事者の養護教諭との関わりは非常に少なく、養護教諭の摂食障害への気づき、休養や相談しやすい関わりや環境が求められていた。摂食障害予防教育は必要とされていたが、時間や状況の都合で現状は行うことが出来ていない、自助グループや家族会の理解度は低く予防教育での利用検討がほとんど無い、当事者も具体的な活動方法が分からないといったことなどが挙げられた。研究結果から、養護教諭の日常的な健康観察、予防的関わりや啓発活動を行いつつ、摂食障害児童・生徒本人と養護教諭の双方が話しやすい関係や環境づくりが必要と考えられた。また、研修会や保護者会などの摂食障害啓発活動を通して学校内の理解が得られれば、今後の摂食障害予防教育、自助グループや家族会による予防教育や援助活動の可能性が示唆された。